

平成27年度 武山養護学校 学校評価

学校目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価	学校評価
	具体的な手立て	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		
<p>〈教育課程・学習指導・授業改善〉</p> <p>(1)授業のユニバーサルデザイン化と合理的配慮の研究を機軸に、授業改善を継続的に行なっていく。</p> <p>(2)武養スタンダードを活用して「わかる・できる」授業を目指すと共に、スタンダードの充実を行なう。</p> <p>(3)ケース研究会を充実させ、合理的配慮について実践事例についての集積を行なう。</p>	<p>(1)①E提案認定の3年目として授業実践とその評価を繰り返して授業改善を行なう。</p> <p>②授業研究において、ユニバーサルデザインと合理的配慮の観点を強化しての研究協議を行う。</p> <p>③教科領域グループを中心に教材教具の整備を進める。</p> <p>(2)①武養スタンダードを実践しながら改善していく。</p> <p>②地域の学校と研究会や研究会を合同で行い共有化・全体化を図りながら、武養スタンダードの検証も行なっていく。</p> <p>③参加促進から理解促進への「セカンドチャレンジ」を見据え、授業内容の充実に取り組む。</p> <p>(3)①毎月のケース研究会を充実させるための工夫を行なう。</p> <p>②合理的配慮の実践事例を集積し、共有化していく。</p>	<p>(1)①授業改善の評価点に照らして実践できたか。</p> <p>②研究協議は有効に行えたか。</p> <p>③教材教具の現状把握と整備、今後の計画的整備は進んだか。</p> <p>(2)①セカンドチャレンジ以降のスタンダードの充実は行えたか。</p> <p>②地域との研究会や研究会の実施とスタンダードの検証は進んだか。</p> <p>③理解促進の観点からの授業内容の充実は進んだか。</p> <p>(3)①ケース研究会は充実したか。</p> <p>②実践事例集などで共有化は図られたか。</p>	<p>(1)①児童生徒がわかりやすい授業づくりに取り組み、授業改善に役立てることができた。</p> <p>②活発な研究協議を行い、UD化と合理的配慮について検討を進めることができた。</p> <p>③各学部で整備に努めたが、さらに整理して使いやすくする必要がある。</p> <p>(2)①取組みに差が出たが、小中学部では、ねらいの焦点化、展開の構造化、共有化について研究を進めることができた。</p> <p>②研究会と研究は校内だけに留まったが、スタンダードを基に授業の検証を行うことはできた。</p> <p>③研究の推進により、教科特性を生かした授業内容を充実させることができた。</p> <p>(3)①各ケースについて様々な角度から意見交換を行うことができ、専門職の活用も進んだ。</p> <p>②実践の事例を校内研究のまとめとして発表することができた。</p>	<p>(1)①新転任の職員が今までの取組を理解し、実践と授業改善を継続する。</p> <p>③学部を超えた計画的整備が今後の課題である。</p> <p>(2)①全学部、部門で効果的な研究を進めていくことが課題である。</p> <p>②地域UD化グループにより地域の情報収集は行えたので、地域との研究会、研究会に発展させていく。</p> <p>③他学部や他部門との情報共有を進め、授業改善につなげていく。</p>	<p>(保護者)</p> <ul style="list-style-type: none"> 保護者アンケートの「児童生徒が学校での学習や行事等に楽しく参加しているか」の質問に、「思う」「ほぼそう思う」の回答が88.6%であった。また、「教職員は児童生徒のことをよく理解しているか」の質問では、「思う」「ほぼそう思う」の回答が87.9%であった。また、「教職員は児童生徒に分かりやすい授業を行っているか」の質問に、「思う」「ほぼそう思う」の回答が88.6%であった。 保護者アンケートでは、「教員により指導力の差がある」「子ども言葉での指導は適当でない」等の意見をいただいた。 <p>(学校評議員)</p> <ul style="list-style-type: none"> 校内評価の報告を聞き、研究を授業の中で実践している様子が分かった。今後も職員全員で取組む姿勢を大切にしていとの意見をいただいた。 	<p>(学校評価)</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業のユニバーサルデザイン化と合理的配慮というE提案のこれまで2年間の研究と授業実践をもとに、「わかる・できる」レベルを目指して各学部が取り組み、教科の特性を生かした授業内容の充実と授業改善を行うことができた。 セカンドチャレンジの「ねらいの焦点化」、「展開の構造化」、「共有化」を進め、授業を充実させることができた。 ケース研究について、専門職の協力を得て、様々な角度から意見交換を行うことができ、研究会を充実させることができた。 合理的配慮について研究を進め、実践事例を校内研究のまとめとして発表することができた。 <p>(改善方策等)</p> <ul style="list-style-type: none"> 武養スタンダードの実践において、他学部や他部門との情報共有を行い、児童生徒の実態に合った研究を進め、授業改善につなげていく。 教材教具の整備について、教育部で各学部、部門の改善状況を集約し、次年度の計画を立てて整備を進め、使いやすくしていく。 研究の成果と地域から集めた情報を基に、地域の学校を中心とする関係機関との研究会、研究会を企画し、地域との情報共有に努めていく。

<p>〈児童生徒指導・支援〉個別教育計画の重点課題を常に意識し、授業実践の充実に取り組む。</p> <p>(2) 児童生徒一人ひとりに応じたきめ細かい指導ができるよう、アセスメント力を高め授業改善を繰り返すなど、教職員の専門性と資質の向上を図る研究・研修を行なう。</p> <p>(3) 保護者や地域の関係機関と連携し、ケース会や「個別の支援計画」に基づいた迅速・適切な支援を行なう。</p>	<p>(1)①個別教育計画における重点課題を日常の指導で意識できるよう授業記録用紙などの工夫を行なう。</p> <p>②PDCAサイクルに活きる個別教育計画になるよう、簡素化等も検討する。</p> <p>(2)①若手教員主導で行なう研修や自主的な研修を奨励する。</p> <p>②随時、専門職等と連携しながら児童生徒の実態把握に努め、実地にアセスメント力を高めていく。</p> <p>③相談手順に基づき、日常的に校内支援が機能するように定期的に検証する。</p> <p>④特別支援学校教員免許状取得を推奨する。</p> <p>(3)①チーム内で気づきの感度を高め、必要機関と連携して児童生徒の支援に当たる。</p> <p>②地域にどのような機関があるのか、児童生徒の暮らす地域の状況がどうなっているのか等の情報を共有する手立てを講じる。</p>	<p>(1)①授業記録の工夫など方策は効果を上げたか。</p> <p>②個別教育計画の活用は行えたか。</p> <p>(2)①活発な研修は実践できたか。</p> <p>②アセスメントは丁寧に行えたか。</p> <p>③相談手順は有効に機能したか。</p> <p>④特別支援学校教員免許状取得者は増えたか。</p> <p>(3)①連携しての児童生徒支援は適切に行えたか。</p> <p>②情報提供や研修などを通じて地域資源についての理解は進んだか。</p>	<p>(1)①指導略案に目標を書くことでこの目標を意識できたり、各学年や教科に応じて工夫できた学部があった一方、取組み不足だったり、できなかった学部もあった。</p> <p>②目標と評価の作成時だけでなく、授業でも活用する道筋をつけることができた。</p> <p>(2)①若手教員主導により研修を実施することができた。</p> <p>②専門職の支援により、指導に活かせるアセスメントを実施することができた。</p> <p>③学部、部門により差は出たが、手順の理解は進み、おおむね有効に機能した。</p> <p>④1名が取得、1名が領域の追加を行った。また、21名が免許法認定講習に参加し、取得のための単位を修得した。</p> <p>(3)①必要に応じて児童相談所、市の福祉課等外部と連携してケースカンファを実施し、支援につなげることができた。</p> <p>②小中学部では、収集した情報を保護者対象の進路学習会などで提供し、理解促進を図った。高等部では、地域資源に学ぶ勉強会を開いて、教職員の理解促進を図り、保護者への支援に役立つようにした。</p>	<p>(1)①業務の効率化により、時間不足を解消し、記録がとれるようにしていく必要がある。</p> <p>②全面的な活用はできていないので、授業中での活用と定着化が課題である。</p> <p>(2)①次年度もより自主的な研修会を推進する。</p> <p>②連携よりは専門職に頼る部分が大きかったので、各職員の力を高めていく必要がある。</p> <p>③相談機能向上のため、手順はさらにわかりやすいものに改善していく。</p> <p>(3)①支援の結果について検証を進め、必要機関との連携より、さらに有効な支援ができるようにする。</p> <p>②情報の収集と集めた情報の提供にさらに力を入れ、即時に利用できる地域資源とともに、卒業後に必要になる地域資源についての理解も促進していく。</p>	<p>(保護者)</p> <ul style="list-style-type: none"> 保護者アンケートの「学校は個別教育計画に基づいた教育を行っているか」の質問に、「思う」「ほぼそう思う」の回答が89.3%であった。 また、「教職員は、児童生徒の必要に応じて個別の対応を行っているか」の質問に、「思う」「ほぼそう思う」の回答が90.73%であった。 <p>(学校評議員)</p> <ul style="list-style-type: none"> 「関係職員間で個別教育計画の情報共有をしっかりと児童生徒の教育にあたってほしい」との助言をいただき、目標や指導の手立てを協議するときや情報共有のときに、誰のことについて話をしているのか、課題は何かを明確にするよう努めた。 保護者アンケートの中で、「教職員は、児童生徒の必要に応じて個別の対応を行っているか」と「教職員は、児童生徒に分かりやすい授業を行っているか」という質問の、「思う」「ほぼそう思う」の回答割合が高くなってきているのは、学校の取組みの成果が現れているのではないかの評価をいただいた。 	<p>(学校評価)</p> <ul style="list-style-type: none"> 個別教育計画の目標を授業略案、研究授業の指導案に記載するなどの方法で、重点課題を意識して指導が進んだ。重点課題を意識した指導面での工夫は今後も継続する。 個別教育計画について、目標の設定と評価の作成時だけでなく、授業に生かす取組みを行うことができた。また、活用がさらに進むよう記載事項の精選等、書式の簡素化を行うことができた。 若手教員主導の自主的な研修については、目標どおり実施できた。 専門職の協力を得て、アセスメントに基づいて実態把握を進め、指導に役立てることができた。 相談手順の理解が進み、校内支援はおおむね円滑に機能した。 認定講習参加による特別支援学校の免許取得希望者が多く21名が参加して単位を修得した。免許の取得者は1名、領域の追加者は1名だった。 地域の関係機関との連携による児童生徒の支援について、必要に応じて児童相談所や市の福祉課等と連絡を取りケースカンファを行い、課題解決に向けて取り組むことができた。 障害者支援に関わる地域の状況と資源について、学部ごとに工夫して学習する機会を設け、保護者の理解を促進することができた。 <p>(改善方策等)</p> <ul style="list-style-type: none"> 個別教育計画の目標を意識した指導で、業務の効率化により授業記録をとる時間を確保したり、学年や学部の状況に合わせて他の方法を工夫したりして、個に応じた目標が達成できるようにする。 児童生徒への必要機関との連携について、支援計画の策定、実施後に結果の検証を情報共有し、さらに有効な支援を模索していく。
--	--	---	---	---	---	--

<p>〈キャリア教育・進路指導〉 (1)キャリア教育の視点から整理された「指導項目例一覧」の活用と、「指導モデル」の充実を行なう。 (2)肢体不自由教育部門の「指導項目例一覧」の策定推進を行なう。 (3)保護者・教職員の進路研修等を、小学部の段階から充実させる。</p>	<p>(1)①「指導項目例一覧」を基に教育実践を見直していくサイクルを定着させる。 ②学部班を中心に「指導モデル」の充実を行なう。 ③高等部においては「高等部版キャリア教育指導モデル」を活用して卒業後を見据えた指導を行なうと共に、小・中学部においてはキャリア教育の視点を持って教育課程を見直していく。 (2)①「指導項目例一覧」を完成させると共に、「指導内容例」の作成を進める。 (3)①「平成 24 年キャリア教育プロジェクト」の進路指導計画を実行する。</p>	<p>(1)①「指導項目例一覧」の活用は進んだか。 ②「指導モデル」の集積は行えたか。 ③各学部においてキャリア教育の視点からの教育課程の見直しを行ったか。 (2)①「指導項目例一覧」を完成、及び「指導内容例」の作成は進んだか。 (3)①各学部で保護者や職員の進路学習会は定着できたか。</p>	<p>(1)①知的障害教育部門では「指導項目例一覧」を教員必携に掲載し、肢体不自由教育部門では作成を完了した。小中学部では活用が進んだが、分教室を含む高等部、肢体不自由教育部門では、活用が進まなかった。 ②小学部、中学部、高等部のつながりがある指導モデルの集積を進めることができた。 ③中学部、高等部においては見直しを行ったが、小学部、分教室、肢体不自由部門では、見直しが進まなかった。 (2)①肢体不自由教育部門で「指導項目例一覧」が完成し、すでに完成している知的障害教育部門と合わせて整えることができた。 「指導内容例」については、小中学部で「調理学習」と「防災学習」のモデルが完成したが、他の学部、部門は作成途中である。 (3)①保護者向けの進路学習会については、各学部、部門、計画通り実施することができ、定着が進んだ。教員向けの学習会については、学部や部門により差が出て、定着までには至らなかった。</p>	<p>(1)①各学部、部門での活用を進め、キャリア教育を意識した指導計画づくりをしていくことが今後の課題である。 ②今後、指導モデルを活用することにより、成果を検証していく必要がある。 ③すべての学部、部門で見直しを行い、キャリア教育の視点から一貫性のある教育課程にしていく必要がある。 (2)①「指導内容例」について作成途中の学部、部門は今年度の授業実践の成果を活かして作成を急ぐ。完成したものについては、活用を図り、成果を検証していく必要がある。 (3)①夏季休業中に行った卒業生の進路先と直結する施設や事業所への訪問研修に 30名の教職員が参加した。学んだことの情報共有等を進め、小学部からの一貫した指導に役立てられるようにしていく。</p>	<p>(保護者) ・各学部、部門で実施した保護者向けの進路学習会で、小学部の保護者から「卒業後の進路について、まずは何から初めていけば良いのかわかった気がします」との感想をいただいた。 (学校評議員) ・キャリア教育の中で、①「人と関わる力をつけてほしい」、②自分の気持ちを伝えられるようにしてほしい」との意見をいただいた。</p>	<p>(学校評価) ・知的障害教育部門、肢体不自由教育部門の両部門での指導項目例一覧の整備により、学校全体としてキャリア教育を進める体制が整った。また、指導内容例として、全学部で「調理学習」と「防災学習」のモデルをつくり活用することができた。 ・キャリア教育について、各学部でつながりのある指導モデルを活用した指導を行い、集積が進んだ。 ・知的障害教育部門の中学部、高等部では、キャリア教育の視点で教育課程の見直しを行うことができた。 ・高等部卒業後の生活を見据えた保護者向けの進路学習会は、各学部部門が計画通り実施し、保護者の理解を促進することができた。 ・長期休業中の施設、事業所訪問について、各学部から延べ 160 名の教員が参加して研修を行った。 (改善方策等) ・両部門の各学部で整備された指導項目例一覧を活用できるよう年間指導計画作成時に検討するとともに、指導内容について、すべての学部、部門でモデルを作って実施し、高等部卒業後を見据えたキャリア教育を行っていく。 ・各学部長や部門長を中心に情報交換と調整を行い、小中高一貫したキャリア教育を進められるようにする。 ・教職員向けの進路学習会について、事業所訪問の報告を含めた情報共有の場を各学部で設定し、高等部卒業後を見据えた指導に役立てられるようにしていく。</p>
--	--	---	--	--	---	--

<p>〈地域のセンター的機能〉 (1)相談担当教員及び専門職を中心に校内外の児童生徒の支援に取り組み、インクルーシブ教育を推進する。 (2)校内研究の成果を地域と共有化するために、地域への情報提供を進めると共に公開研修会や研究会を行う。 (3)通学支援や余暇支援などに関連機関及び保護者と共に取組んでいく。</p>	<p>(1)①巡回相談の増加に伴い地域との連携のあり方を再検討すると共に、相談担当教員と専門職との役割分担や協力体制の強化を行なう。 (2)①ホームページの内容更新を行なうなど研究グループと協力しながら校内研究の成果を地域と共有していく。 ②地域のニーズに適した夏季公開研究会を行ったり、研究グループと協力して地域と合同の研究会などを行なう。 (3)①児童生徒安全班や保護者と連携しながら、自立に向けた通学支援や安全な登校下校をサポートしていく。 ②週末や長期休業中の余暇支援へのサポートを、連携支援部以外の教員とも協力しながら行なっていく。</p>	<p>(1)①地域と本校のセンター的機能のあり方の整理や校内体制の整備は進んだか。 (2)①ホームページの活用や他の工夫から成果の共有化は進んだか。 ②地域に開かれた研修会、研究会は効果的に行えたか。 (3)①自立に向けた通学支援は進んだか。 ②余暇支援の充実と校内体制の整備は行えたか。</p>	<p>(1)①センター的機能として、巡回相談や余暇支援について例年通りの支援を続けながら、専任や担当校務グループの枠を超え、学校全体としての支援体制について検討した。 (2)①ホームページでの情報発信は昨年度の研究のまとめまでに留まり、リアルタイムでの成果の共有は進まなかった。 ②アンケート結果などを生かし地域のニーズに適した研修会を実施し、地域からの参加者が多数あり、効果的に行えた。 (3)①学部ごとの教育活動に、自力通学や自立に向けたねらいを設定して取組んだ。 ②収集した情報を児童生徒や保護者に発信し、学校と地域が連携して余暇支援の充実が図れた。</p>	<p>(1)①一部の教員にかかっていた負担軽減のため、学校全体として取組む支援体制の改善策を決め、次年度当初から実施する。 専門職、相談担当教員との役割分担や協力体制の強化は、今後も継続していく必要がある。 (2)①研究班から校内のみに発行した新聞等、共有すべき資料はあるので、共有化の方法を探っていく。 ②地域との合同研究会は進めることができなかったため、方策等を検討していく。 ②より多くの教員の協力を得るために、業務の見直しや体制の整備に取組んだので、次年度はその結果を検証していく。</p>	<p>(保護者) ・保護者アンケートの「学校は、地域の特別支援教育のセンターとして役割を果たしているか」の質問に、「思う」「ほぼそう思う」の回答が72.1%であった。 また、「学校は、地域の活動に協力しているか」の質問に、「思う」「ほぼそう思う」の回答が78.6%であった。 (学校評議員) ・「ノーライゼーションの普及を含めて地域とのつながりを大切にしてほしい」との意見をいただき、地域防災デーの参加促進、交流フェスティバルへの地域の方々の招待と関係機関の参加依頼、地域への自力通学者への支援依頼を行い、障害者に対する理解促進を図った。 (その他) ・「衝動的な行動をどう考える！」というテーマで行った公開研修会に本校教員74名を含めて参加者が169名あり、テーマ設定について「幅広い参加者を対象にしたテーマであり、現場の教員や保護者が困っている子どもの行動に直結しているテーマであった。」他、肯定的記述が88件あった。また、内容については、「現場に基づいた話、具体例が豊富で、具体的なイメージを持って聞くことができ、現場でも活用しやすく、わかりやすい講義であった。」他、肯定的記述が100件以上あった。</p>	<p>(学校評価) ・センター的機能に関して、地域のニーズに応じて相談業務や余暇支援業務を行いながら、グループ業務の見直しを行い、校内体制の整備を進めることができた。 ・昨年の校内研究の成果はホームページを通じて地域と情報共有できたが、今年度の研究は、公開授業や公開研究会の場を通じて行うだけとなった。 ・地域に開かれた研修会では、昨年度の反省を活かし、地域のニーズに応じた公開研修会を実施でき、100名近くの参加者を得て、アンケート結果も好評だった。 ・自立に向けた通学支援では、学部ごとの教育活動にねらいを設定して取組むことができた。 ・余暇支援活動に関しては、地域からの情報を迅速に児童生徒や保護者に伝えることで地域の活動への参加促進を図るとともに、教職員の支援体制の調整を行うことができた。 (改善方策等) ・相談機能については、相談班の業務見直しに伴い、専門職と相談担当教員との連携、協力をさらに強化していく。 ・地域の余暇支援活動への支援体制を職員全員で行うよう変更し、平成28年度から実施して結果を検証する。 ・ホームページでの地域との研究成果の情報共有について、内容を整理し、公開準備を進めていく。</p>
<p>〈学校運営・学校管理〉 (1)環境整備計画に基づき、学校環境整備事業をさらに推し進めていく。</p>	<p>(1)①体育館耐震工事に関して安全確保のための環境整備と、必要に応じての行事見直しを行なう。 ②PTAや研究グループと連携しながら、環境整備計画のもとに環境整備事業を継続する。</p>	<p>(1)①体育館耐震工事に関する事象については安全・適切に行えたか。 ②計画通り環境整備事業は実施できたか。</p>	<p>(1)①体育館以外の場所を使い、安全に留意して活動を行うことができた。 ②PTA班が中心となり、計画通り実施することができた。</p>			<p>(学校評価) ・体育館の耐震工事に伴う各学部での教育活動については、工事予定や危険箇所を周知し、各学部で調整を行うことができた。 ・環境整備事業については、PTA班が中心となり、計画通り実施することができた。</p>

<p>〈学校運営・学校管理〉</p> <p>(2)防災対策や体制の整備を、保護者や地域と協力しながら進めて行く。</p> <p>(3)業務執行体制の確保を行い学校運営組織が円滑に運営できるよう、情報共有や連絡調整機能を高める。</p> <p>(4)「武養教育宣言」を意識しつつ、支え合い学び合う教職員集団になるよう研修や職場づくりをすすめる。</p>	<p>(2)①地域防災訓練への参加や周辺施設との防災協定締結への働きかけにより、地域との防災協力体制を強化していく。</p> <p>②スクールバスハザードマップの周知や職員向け防災教育情報の強化、防災訓練の工夫などを行うことにより防災体制の整備を行なう。</p> <p>(3)①効率化・簡素化の観点からグループ業務の見直しと連携体制の強化を行う。</p> <p>②情報共有の方策、行事や会議の精選、引継ぎの効率化などを検討する。</p> <p>③会計処理システムの周知・徹底を行い、ミスが無いようにする。</p> <p>④アレルギー対策や医療ケア体制の理解を進め、安心安全な学校生活を営む。</p> <p>(4)①「武養教育宣言」を折に触れ意識し行動に移せるように手段を講じる。</p> <p>②一人の学びを共有化・全体化できるような方策を講じると共に、日常的な協力と連携の体制を工夫する。</p>	<p>(2)①地域防災訓練への参加など地域との防災協力体制の強化は進んだか。</p> <p>②保護者や職員の防災意識は高まり防災体制の整備は進んだか。</p> <p>(3)①グループ業務の整理を行ったか。</p> <p>②現状の整理が進み、時間の確保や効率化は進んだか。</p> <p>③会計処理についての適切化は進んだか。</p> <p>④アレルギーや医療ケアに対して安全は確保できたか。</p> <p>(4)①日々「武養教育宣言」を意識しての教育実践は行えたか。</p> <p>②支えあい学びあいの工夫は行えたか。</p>	<p>(2)①武山中学校で行われた地域防災訓練では、参加することだけに留まった学部もあったが、肢体不自由教育部門では他校の養護教諭等に児童生徒の状態を見てもらい協力体制の基礎を築くことができた。</p> <p>また、愛光園との防災協定締結に向けて書類作成の段階まで進んだ。</p> <p>②避難訓練や災害時児童生徒引渡し訓練を通じて、保護者や職員の意識を高め、体制の整備を進めることができた。</p> <p>(3)①グループ業務を見直し組織の再編を行ったが、新たな班で担当する個々の業務の整理にまでは至らなかった。</p> <p>②日々の業務の遂行に追われ、業務の整理を行うことができず、時間の確保や効率化を進めることができなかった。</p> <p>③書類の様式の適正使用を進め、会計処理を適切に行うことができた。</p> <p>④アレルギーへの対応は適切に行うことができ、医療ケアについてもヒヤリハットの活用で、改善を進めることができた。</p> <p>(4)①教員必携や学部のレジュメに宣言の文言を載せ意識の浸透を図ったが、意識の定着には個人差があった。</p> <p>②中学部では個人が受けた研修を伝達講習という形で共有化が行われ、報告・連絡・相談体制が定着し連携が進んだが、他の学部、部門では目標の達成ができなかった。</p>	<p>(2)①分教室では津久井浜高校の避難訓練に参加、NTT 通信研究所の訓練の見学ができたので、さらに地域との協力体制を強化するにはどうするか検討する。</p> <p>②本年度初めて行った災害時児童生徒引渡し訓練の反省を活かし、さらに体制の整備を進めていく。</p> <p>(3)①次年度も新たなグループ・班での業務整理を継続して行っていく。</p> <p>②業務の引継ぎ資料等の整備は進めているので、次年度は他の方策を検討して進める。</p> <p>(4)①文言としては浸透が見られたので、常に実践に反映できるようにすることが今後の課題である。</p> <p>②学びの共有化と全体化を行うための時間を確保する方策を講じるためにも、業務の整理と効率化を急がなければならぬ。</p>	<p>(保護者)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者アンケートの「学校は児童生徒の健康・安全・防犯に努めているか」の質問に、「思う」「ほぼそう思う」の回答が88.6%であった。 <p>(学校評議員)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「事故・不祥事防止の観点から職員の資質の向上として、人と接する力を高めていく必要がある」との意見をいただいた。 また、学校目標について、具体的な取組みがなされ、徐々に成果が上がってきていると思われるとの感想をいただいた。 	<p>(学校評価)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本校では武山中学校で開催された地域防災訓練に参加し、特に肢体不自由教育部門の児童生徒の様子を知ってもらうことができ、分教室では津久井浜高校の避難訓練に参加したり、NTT 通信研究所の訓練を見学したりして、地域の理解を得ることができた。 また、愛光園と大規模自然災害時の共助に関する覚書を交換することができた。 ・避難訓練や災害時児童生徒引渡し訓練を通じて、保護者や職員の意識を高め、体制の整備を進めることができた。 ・業務の見直しとグループの再編を行ったが、業務整理による仕事量の軽減までには至らなかった。 ・会計処理については、出入金に使う書類の書式の適正使用を進め、記載内容のチェックを行うことで、適切に行うことができた。 ・アレルギーへの対応は、確認の徹底を行うことで適切に行うことができた。また、医療ケアについては、ヒヤリハット事例と改善策の提示により事故を防ぐことができた。 <p>(改善方策等)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域防災訓練で、本校ができる協力について検討し、訓練時に実施していく。 ・新たな業務グループで、業務を遂行しながら、業務の効率化と簡素化の観点から業務整理の提案を行い、業務改善を進める。 ・武養教育宣言について、学部会での確認、授業の振り返りで実践できたかの評価を行い、授業改善に役立てていく。 ・支えあいの工夫では、グループリーダーやチームリーダーが中心となってメンバーの業務の進行状況を把握し、日常的な協力と連携体制を整えていく。
---	---	---	---	---	---	---